String Fiction Series

8

ビオラを弾く生活

YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆
Duo-Yamanka

ビオラを弾く生活

山中與隆

目次

ビオラを弾く生活　1
編者あとがき　63

ビオラを弾く生活

山中與隆

今日の午後レッスンがある。その前に少しは指慣らしをしておかないと。だが、なかなかその気になれない。わたしは朝食がすんでもそのままテーブルを離れないでぐずぐずと新聞を読み続けた。妻はさ

っさと後片付けや洗濯にとりかかっている。新聞を広げているわたしのそばを忙しそうに行ったり来たりする。わたしには、それがわたしに対するあてつけのような気がしてくる。もともと新聞が読みたくて読んでいるというより、次の行動を起すのが億劫でそうしているのだから、まわりでバタバタされると気が入らない。

「忙しそうだね」

わたしの声に、妻は皮肉の響きを聞きとったのか、
「今日、レッスンがあるのでしょ」
と、子供に宿題をしなさいというような調子を込めて言いかえす。わたしはガサガサと大きな音を立てて新聞をたたんで、速足で練習室に立った。
「なに怒るのよ」
と妻がわたしのうしろ姿に向かって言っているのが聞こえたが、わたしは無視して練習室の扉を強く閉

めた。

確かにいまのわたしは、怒っているような気分である。それはわたしの周りでバタバタ用事を始めた妻に対してではなく、やるべきことがあるのに、気持ちがそれに素直に向かわない自分に対しての怒りである。

定年退職した五年前には、溢れるばかりの意欲に満ちて始めたビオラを中心に据えた生活が嘘のよう

に、いまはわたしの体や心の何処を探しても、そういった意欲のかけらも見当たらない。

五年前、定年後の生活のために建てた小さなマイホームには、念願だった音楽に満ちた生活のために防音を施した音楽室を作った。

停年の翌日、かねてから決めていたビオラの先生を訪ね、レッスンと同時に良い楽器の選定を頼むことになる。妻も
「長年のご苦労に報いる」
のだからと楽器購入を賛成してくれていた。

わたしは先生の前で練習してきたエチュードを弾いた。

「そうとう弾いてこられたんですね」
わたしの演奏を聞いた先生の最初の言葉だった。そして、
「そんなにお弾けになるのだったら、もう少し楽器をグレードアップしても良さそうですね」
と言われた。それで、いきなりの楽器選定をお願いすることになったのだ。わたしが予算は百万くらいで、と言うと、

「それだといまお持ちのものよりは良いのがあると思いますよ。でも、ぜんぜん桁違いに良い音がするとは言えないかも知れませんね」

格段に差がわかるには、わたしの予算の五倍くらいは必要かもしれないと、先生は言った。そして、「ご存知と思いますが、ストラディのようなのは天文学的な値で、少々のお金持ちでも個人で買うには限界を超えているし、それほどでなくても、少しで

も名のある楽器は、その楽器の持っている本当の価値以上の値になっていますからね。でも名の知られていない楽器のなかに、本当に良いものは結構あるものですよ」

わたしが苦学生とかではなく、定年退職したばかりで、家まで新築して音楽的な余生を送ろうとしていると知っての提案だったようだ。わたしは先生が言うような出物があったら何とか無理をしてでもこ

の際がんばってみたいと言ったのだった。
「お忙しいのにすみません」
「いや大丈夫です。良い楽器を探すのは楽しいですから。わたし自身はいまのところ楽器を買うつもりはないし、買えもしないけど、それでもときどき良いのが入ったという情報があると楽器屋に見に行くくらいですから」
と言って安心させてくれた。

帰り道わたしは初めての訪問と、わたしにとっては特別大きな買い物に踏み込んだことで興奮していた。

家に帰って妻に先生のところであったことを話すと、

「百万前後と言ってたじゃないですか」

と、さすがに五倍という話を問題にしてきた。

「もう頼んでしまったの」
「幾らのがあるかはわからんけど、上限はそれくらいまでって言ってしまった」
「家からは、そんなお金出ないわよ」
このような時、頼む側はもっぱら低姿勢でいくより仕方ない。
「家がそれくらい高かったと思って、なんとかならない」

「だって五百万でしょ。お金が有り余っているわけじゃないのですからね。だいたい退職金が幾らあったのかご存知でしょ」

わたしはそれ以上あれこれ言うのを止めた。妻の表情に、何とかなるかどうか計算してみようというけはいが読み取れたからである。

しばらく考えていたが、妻は三百万くらいなら無理をすれば何とかなるかもしれないと言った。し

かし、先生との会話から推測すると、おそらく先生は五百万と言えば、その予算いっぱいを使っていい楽器を探すだろう。その日は、それ以上話は進まずにおわった。わたしは練習室に入って、ひとり長い時間次のレッスンまでに練習することになったエチュードをさらった。

いずれにしてもこの楽器で弾くのはもうあまり長くないと思うと、無性に愛着が湧いてくるのだった。

なにしろ社会人になってすぐ五十五万円で買ってから今日まで、四十年近く弾き続けた楽器である。この日以降、長年連れ添った楽器の最高の音を出そうと、何となく感傷的な気分で練習をしたのだった。

その後一箇月の間に二回あったレッスンで、先生が探してくれた三つの楽器と追加されたもう一つの、いずれとも決めがたいような四つの楽器の中から一

つを決めたのだった。

最初楽器屋から先生が借りてきてくれたのは、四百万、五百五十万、七百万という、どれも妻と相談した金額とは相容れない額ばかりであった。

このことを妻にどう切り出すか、わたしは難問を抱えて帰宅した。三つの楽器を弾いてみた素晴らしさと、これまた素晴らしい価格のことを正直に話し

た。今の楽器と比べて断然グレードアップしたと感じられる楽器を、先生は選んでくれていることを強調した。

「百万前後の楽器では、グレードアップにならないということは、結局サンプルが無かったのだから、証明されなかったわけね」

やっぱり言われた。その点を突かれることは予想がついていた。

「うん、その辺は先生の判断に一任ということだよね」

しかし妻の表情は何となく厳しくない。笑顔さえ見せながら、

「あなたのことだから、五百万といったら結局五百万を手に入れてしまうのでしょ。そう思って今日一日あなたがレッスンに行っている間、いろいろ計算してみたの。あなたのこれからの二十年の生きがい

を買うと思えば安いものよね。お好きなのにしたら」
何たる拍子抜け。わたしとしてはどういう顔をすればいいのか。
その夜わたしは久しぶりに妻を抱いた。妻はそんなことしなくてもいいのにと言いながら、まんざらでもないようであった。しかし実際にわたしは妻の配慮に感激していたのである。
翌週、いよいよ楽器を決めるのだと興奮しながら

レッスン室に入ると、三台のはずの楽器が四台になっている。
「先週あなたが大きな楽器に興味をもたれていたようだったので、それと似たやつを一台借りてきました」
そう言いながら、やや汚れたケースを開けた。
「これは六百万ということですが、七百のやつに決して遜色ないですよ」

先生が弾くと確かに朗々とした野太い音がする。中音から高音にかけては実に柔らかい美音である。その音域で先生は《アルペジョーネ・ソナタ》の一説を弾いた。夢見るような響きだ。わたしは瞬間的にこれだと思った。

楽器は深い飴色に光っているが、かなり古いものなのか傷も多い。裏板の木目は金色に輝く模様がはっきり出ていてとりわけ美しい。

「これいいですね」
わたしは何の理由もつけずに結論を言ってしまった。
「わたしでもそうすると思いますね。それにこれが六百というのは大変買い得です。実はこれだけは楽器屋ではなく、あるオーケストラで弾いているわたしの友人が、自分は買い換えるので誰か買ってくれる人を探していたのを思い出して、借りてきたものです。かれが昔からいい音を出しているとは思って

いたのですが、手にとって見るのはわたしも初めてです」

「その人は、もっといいのを買われるのですね」

「そうらしいですね。すでに手に入れているようですが、わたしはまだお目にかかっていませんがね。楽器屋に下取りさせるとあれこれいって安く叩かれるのを嫌って、中間マージンなしで直接大切に使ってもらえる人に買い取ってもらいたいと言っている

のですよ。それに彼が使っている弓も一本つけて六百というのです。弓だけでも七、八十万はすると思いますよ」

「ありがたいです」

「それでよかったら、このケースごとそっくり持って帰ってください。ただし、そういうことなのでいまのあなたの楽器の下取りはなしですけどね。それは楽器を修理や調整に出したりしたときの予備にお

持ちになって置いたらいいですよ」

わたしは非常な幸運にめぐり合えたような気がしていた。その日は、その新しい楽器と弓でレッスンを受けた。自分の楽器で練習しているときに音になりにくいと思っていた第四弦の音が軽く音になる。弓のせいもあるかもしれないが、とにかく楽器だけでなく腕までワンランク上がったような気がした。代金は直接そのビオラ奏者の口座に振り込むように

しようと言って、先生はその場でビオラ奏者に電話をされた。

「先生にお世話していただいたお礼はどうさせていただきましょうか」

「とんでもない。わたしもいろいろな楽器を見ることが出来て楽しかったですよ。わたしはあなたが喜んでその新しい楽器を愛用してもらえればうれしいことです。がんばってください」

先生の配慮は涙が出るほど嬉しかった。定年後の新しい門出を祝ってもらったように、こうして華々しく音楽三昧の生活がスタートしたのだった。

それからは、毎日朝が来るのが待ち遠しかった。起きるとすぐに楽器を開き、眺め回してから、朝食までのひと時を新しい楽器の響きを楽しんだ。

妻はわたしがまだ現役のときから、翻訳の仕事を在宅でしている。そのための仕事部屋もちゃんと作

ってある。妻はわたしが停年になって、毎日家の中でごろごろされたらどうしようかと言っていたが、良いおもちゃをあてがうことが出来たと喜んでいる。お互いの領域を邪魔しないようにそれぞれのことに専念する生活が始まっていた。家事はルールを決めて分担した。

わたしはレッスンが楽しみで仕方なかった。練習量はサラリーマン時代と比較にならないくらい増え

た。楽器と弓が良いものに変わり、良い先生についたということで、六十を過ぎていたのに、一段と腕が上がったことが自覚できる。レッスンで弾いている曲自体が、これまで難しそうで手もつけなかったような曲を練習しているのだから間違いない。

あれから五年、あのときのハイテンションが嘘の

ような今日この頃である。あのころにもスランプはあったが、そのつど良い演奏を聞いたり、先生が主催するセミナーに参加したりして、あちこちから集まる若い学生たちとともに勉強することで刺激を受けて、意欲が蘇ってきた。

しかし、このところの低迷は、そもそも音楽を聞いても心が動かない。感受性が萎びてしまったようなのである。

ビオラを弾くこと自体が気持ちを盛り上がらせない。さらに言うなら、かつてのように強くは、体が音楽を求めていないような気がする。

結局わたしはこの日、一度も楽器のケースを開けないで先生のお宅に向かった。レッスンはいつものように始まった。先生はしっかり練習してきた生徒を迎えるように、迎え入れてくれた。もちろんわた

しもいつもどおり笑顔で挨拶してレッスンを始めてもらった。

先生はいつものようにレッスンを進めてくれたが、わたしの練習が十分でないことはお見通しのはずである。

続く日々にも重たい気持ちを押しのけながらやっとの思いで練習を続けた。

いつごろからこうなったのだろう。ビオラを弾く

ことにあまり気が向かないことは、これまでにも幾度となく経験している。しかし、そんなときに音楽を聞いたり、仲間と四重奏を合わせたりすることによって音楽する気持ちはかならず戻っていた。しかし今は違う。同じように音楽会にも行くし、仲間と四重奏もしているのだが、いまひとつ気分が盛り上がらない。歳のせいだろうか。弾くことだけでなく、音楽を聞くことにもあまり意欲的になれないのが気

にかかる。

何とかしてわたしの音楽心に、もう一度火をつけることは出来ないものだろうか。

わたしはこの閉塞的な状況を打破するためのカンフル剤としてひとつの決断をした。

それはあるセミナーに参加することである。そのセミナーはもともとプロを目指す若者たちのための

もので、わたしのようなアマチュアは対象でなかったが、最近その枠が広がってアマチュアにも門戸を広げている。しかし実際に参加するアマチュアはほとんどない。わたしは、参加することを先生にも言わなかった。反対されると思ったからではなく、自分だけで行動してみたかったのである。

セミナーは、ゴールデンウィークの六日間の合宿

である。申込書には参加者のレベルを問う項目がある。わたしはセミナーの課題曲が弾けると書いて申し込んだ。課題曲としては、ブラームスのソナタやシューベルトの《アルペジョーネ・ソナタ》それにヒンデミットのソナタなどの曲名が並んでいた。ヒンデミットはもちろん、ブラームスやシューベルトも全曲を通しては弾けない。だがわたしはそれらの中から《アルペジョーネ・ソナタ》で受講すること

にした。つまりわたしは嘘の申告をしてセミナーに潜り込んだのだ。そうとは知らず、主催者からは丁寧な歓迎の手紙が届き、費用の振込みのことや宿泊の手続きなどが説明されていて、さらに《アルペジョーネ・ソナタ》を清水弥生先生の担当で受講していただきますとしてあった。清水弥生といえば日本を代表する名手で、ヨーロッパの有名なオーケストラにソロビオリストとして入団するという噂の人で

ある。わたしはいささかびびった。セミナーは三か月後。三か月では逆立ちしても《アルペジョーネ・ソナタ》を弾けるようにはならない。しかも辛うじて弾けたのではだめである。ほかの受講生は、各地の音大生たちである。《アルペジョーネ・ソナタ》の音も満足に取れないような者はおそらく一人もいないだろう。彼らは、最初からもっぱら音楽的な内容のレッスンをつけてもらうために集まってくるはず

である。しかも、このセミナーはすべてのレッスンが公開である。人数はともかく聴講者がいる中でレッスンを受けるのである。その聴講者の多くはセミナーの受講生たちで、多分同じ曲を同じ先生に見てもらう人たちのはずである。わたしの頭の中は、どうやってキャンセルしようかということで一杯になった。そう思いながらも《アルペジョーネ・ソナタ》を練習した。とにかく全曲はどうにもならないから、

第一楽章だけに絞ることにした。それでも指が回らないところが何箇所もある。頭の隅でキャンセルを考えながら練習を続けた。先生には言ってないので、レッスンでは別の課題をしなければならない。そうしているうちにキャンセルの考えは薄れ、セミナーで赤恥をかき、途中で金を返されてお引取りを願われても仕方ないと腹をくくるようになっていた。一日十時間以上ビオラを弾く日々が続いた。指が腱鞘

炎になりかけると筋肉痛の薬を刷り込んで凌いだ。
《アルペジョーネ・ソナタ》を弾くこと以外何も考えない数十日が過ぎた。

わたしは車でセミナーが開かれる山口県の施設に向かった。会場が近づくに従って、赤恥をかく恐怖感が持ち上がってくる。
開会式で居並ぶ講師陣の中にテレビやコンサート

でしか見たことのない清水弥生の姿を認めて、さらに恐怖感がつのった。しかし清水弥生本人は優しい笑顔で座っているだけであった。

恐怖のレッスンは、いくつかの手続きを済ませるとすぐに始まることになっている。貼り出された予定表によると、わたしのレッスンは三時間後になっている。『清水先生』の欄に自分の名前が書いてあるのをみて、足が震えた。空き部屋で指慣らしをした

後、わたしの前の受講生のレッスンから見学しようと、『清水先生』と書かれた部屋に入った。間違いなくあの清水弥生が、開会式の時とは違ってラフなジーンズ姿で、レッスンをしている。優しく美しい笑顔で、女子学生のレッスンをしている。ブラームスのソナタだ。時々清水弥生が弾いてみせる時の音が、受講生のとは別の曲かと思えるほど充実して美しい。わたしは、次に自分が受講するということも忘れて

聞き入った。しかし、あっという間にその人のレッスンは終わった。受講生が一礼して下がると、清水弥生が、

「次の方いらっしゃいますか」

と数名いる聴講生の席を見回した。

「わたしです」

返事をしてわたしは前に出て、

「お願いします」

とお辞儀をした。清水弥生は若い学生ばかりと思っていたのか、頭のはげた親父が出てきたのでちょっと驚いたようだった。しかし、すぐに笑顔に戻って、

「どういうところでお弾きになっているのですか」

と、楽器を出しているわたしに尋ねた。わたしは、市民オーケストラや仲間と室内楽を楽しんでいることなどを言い、このセミナーを受講するレベルにないと思うが、大きな動機づけが得たくて参加したこ

とを話した。

「いろいろの方が参加されるのはとてもいいことですわ。わたしもそのほうが楽しいです。《アルペジョーネ・ソナタ》ですね」

清水弥生としては優しくわたしの気持ちをほぐしてくれているのだろうが、わたしのほうはもう額に汗をにじませて受け答えをしている。何人かの聴講生が部屋を出て行った。部屋には一人の学生風の若

い男だけが残っていた。もしかしたら次の受講生かもしれない。出て行った人たちは、こんなおっさんのレッスンを聞いても参考にも何にもならないと思ったのだろう。

ピアノ伴奏をしてくれるピアニストがラの音を鳴らした。それに合わせて自分の楽器を調弦せよということだ。わたしがピアノのラを取って他の弦を合わせ始めたとき、清水弥生が、

「そのラちょっと低くないですか」
と言って、もう一度ピアノから音を取るように促した。低いと言われたがわたしには判定できなかった。ピアノが鳴らすラを一生懸命聞いて、アジャスターで少し高めた。
「それくらいかな」
清水弥生が言ったので、それで他の弦を五度調弦で合わせた。わたしが、調弦が終わったという風に清

水弥生の方を見ると、
「C線をもう一度」
とさらなる調弦を指示した。わたしは調弦も満足にできない者が紛れ込んだと思われていると思って顔が赤くなるのを感じた。長いことG線とC線の重音を鳴らしながらやっと調弦を終えた。それで良かったのかどうかにも自信がなかったが、清水弥生は、調弦についてはもう何も言わなかった。わたしが清

水弥生の顔を見ると、彼女はにっこり笑って、どうぞと言うように促した。わたしはついに《アルペジョーネ》を弾くときがきたと観念した。

「第一楽章をお願いします」

わたしは言って、楽器を構えた。ピアノがゆっくりと前奏を弾き始めた。十小節目、瞬く間にわたしの出番が来た。出だしの十数小節だけは自信がある。しかし、清水弥生の前である。弓の運びが自分でな

いような感じだ。ビブラートも上手くできない。二十小節くらい行ったところで清水弥生に止められた。

「この曲はだいぶ弾かれましたか」

わたしは、自分としては相当練習したつもりである。しかし、今弾いた《アルペジョーネ》は、練習してきたものとは似ても似つかない哀れな演奏だった。

「自分なりに練習はしたつもりですが・・・上がってしまって」

「第一楽章のレッスンをご希望のようですが、この曲の初めのほうを使って、ビオラの音の出し方を中心にレッスンさせてもらってもいいですか」
「もちろんです。そのほうがあり難いです」
「この曲は、ビオラの最も良い音域のメロディで始まりますね。ここをぜひ素晴らしい音で始めましょう」
そう言って、清水弥生は自分の楽器を持って簡単に

調弦すると、ビオラの出だしを弾いて見せた。わたしは彼女の《アルペジョーネ・ソナタ》をコンサートで聞いたことがある。そのときも素晴らしいと思ったが、いま目の前で弾かれた一節は、まさにわたしのために弾かれたものであり、感慨無量であった。

「あなたのは腕の重みのかけ方が足りないと思いました。ここまでいいですから弾いてみてください」

わたしは、いま目の前で弾かれた清水弥生の音を真

似しようとして弾いた。
「いまはビブラートなしでいいです」
わたしはもう一度弾いた。
「もう少し腕全体の重みをかけて・・・そうです・・・」
こうしてビオラが出てから十三小節目の最初の音までだけを、四十五分のレッスン時間を使って指導された。第一楽章全体のレッスンのつもりで準備してきたが、楽章全体などレッスンされるレベルになっ

ていないことは明らかだったので、この清水弥生のレッスンは、わたしが望むものであった。一人残っていた聴講生も身を乗り出すようにして聞いていた。

「ビオラは音色が良くないと、ビオラの存在価値はないから、何を弾くときも今日あなたが出されたような音で弾かれるようにがんばってください。とても良い音でしたよ。初めの方だけしか見られなくてごめんなさいね。ではまた次のレッスンで」

清水弥生はそう言いながら楽器を片付けて、レッスン室を出て行った。わたしは丁寧に礼を言って、席に戻った。

聴講生は次のレッスン生ではなかった。わたしが聴講生の聞いていた席の近くで楽器を片付けていると、聴講生が、

「先生がおっしゃっていた通りで、良い音が出ていましたよ。その楽器、良さそうですね」

「ありがとうございます。次のレッスンで待っておられるのかと思いました」
「いや、わたしは一番初めでした。先生のレッスンが素晴らしかったので、ずっと聞いていたのです」
本当に、生徒の状況を的確に把握して、その生徒に合ったレッスンをする素晴らしい先生だった。
「でも、曲のレッスンでなかったので悪かったですね」

「とんでもない、わたしにとってもすごく良いレッスンでした。ありがとうございました。実はわたしも上がってしまって、音程は定まらないし、伸びのある音も出せなくて、何とか一楽章を見てもらいましたが、わたしにとっても、今のようなレッスンが良かったような気がしました」

わたしは残り三回の清水弥生のレッスンで、一回

目と同じように、曲の一部分を使った、主にビオラらしい音というもののレッスンを受けた。そして受講生の全員が出演することになっている、終了演奏会には、清水弥生との話合いで出なかった。

お金もかかったが、今回の経験はわたしのビオラ人生にとってかけがえのないものであった。

そしてそれはわたしにとってカンフル剤になったのか。

わたしは帰宅してから、ひたすら弾けないところをさらうというやり方ではなく、何を弾くときにもまずどのような音を出すかを考えながら練習するようにした。それは弾いているのがエチュードであっても曲であっても、これまでと違って、音楽をしているという感覚が沸くものであった。

レッスンで、最近音が変わってきたと言われた。わたしはセミナーのことを白状した。もちろん先生

は怒ったりはしないで、今後も積極的にいろいろな体験に挑戦するように勧められた。

多少なりと前に進みだしたように思える状態が、どれくらい長続きするかわからないが、少なくともいまは満たされた気分でビオラに向かうことができている。

（完）

＊この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール（二〇一〇年五月）より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 08
ビオラを弾く生活

2022年11月10日初版発行
著者:山中興隆
編集:山中伶子
https://www.ac-illust.com/
・タイトル: 弦楽器グラデーション
作者: t-dunさん
イラストのID: 2610321
・タイトル: 花のフレーム2(黒)
作者: 猫エンジンさん
イラストのID: 1587380
https://www.silhouette-ac.com
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105365
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105366
https://www.photo-ac.com
・タイトル:チェロ
作者:r**********mさん
写真のID:3669919
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com